

オモニの情で北朝鮮からの生還

岩手県 及川 誠

一 生い立ち

私は大正十五（一九二六）年十月二十五日に農家の長男として生まれた。若い両親で、父は日支事変で二度も召集され、私が小学校高等科一年のときに帰って来た。父は私に「卒業したら何になるか」と聞いた。私は、隣の方が国鉄の機関士で制服で帰宅するのを見て憧れていた。

当時は兵隊志願か軍需工場に就職するのが常識的であったが、私の気持ちを聞いた父は「国のお役に立つなら」と、反対はしなかった。私は「朝鮮鉄道では高い給料を頂きながら勉強できる」との募集要項を見て受験したが、幸運にも合格した。昭和十六（一九四一）年三月、水沢駅で乗車して出発した。母は「そんな遠くへ行かなくても」と発車するまで涙ぐみ、下を

向いていた。

二 渡鮮、白岩に

関釜連絡船は、玄海灘の荒波にもまれ翌朝に釜山港に着いた。勤務地は、咸鏡北道吉州郡白岩機関区であった。列車は支線に入り、険しい山が迫り、あえぎながら黒煙を上げて登った。谷間は氷結していて、これが氷河かと思った。

トンネルを出ると突然眼前が開け、大高原の町が現れた。そこが白岩であった。白岩は日本海沿岸の町吉州と鮮満国境の町恵山鎮との中間で、白茂線の分岐点でもあり、鉄道施設が建ち並ぶ鉄道の町であった。標高一千メートルの高地である。

駅裏の階段を登り、独身者用の「益濟寮」に入寮した。冬は零下二十度を越す厳しい寒さだが、夏は落葉松、白樺の若芽が、また阿片の原料になる芥子の花が一面に咲く美しい景色である。私には、すべてが初めて見る風景で強い印象を持った。

機関区の仕事はSL蒸気機関車の運行で、朝鮮出身者が四十パーセントで、その人たちは極めて優秀な皆

さんであり、厳しい規律を要求される職場だけに、機関士としての友情は固かった。

三 終戦、白岩との別れ

寮生は勤務時間が区々で、勤務計画に従って早朝とか深夜とかに出勤して乗務するので、終戦を知ったのも遅かった。八月二十日ごろに、「日本人は集合せよ！」との連絡により、いぶかしく思いながら機関区に出勤した。正門には赤旗が翻っていた。事務室前の名札板には日本人だった区長、助役の名札はなく、すべて朝鮮人名の区長以下の組織表が掲示されていた。

朝鮮人の新区長さんから「日本は八月十五日、連合国に無条件降伏し、戦争は終わった。朝鮮は独立し、新しい国となった。日本人は退職し帰国すること。ご苦労であった」との挨拶を上の方で聞いた。それとなく日本の敗戦を薄々と感じてはいたものの、はつきりと聞くとは愕然としてしまった。寮に帰り、みんなと協議したが、その結果、これからは各自の責任で自由行動とすることに決まった。

官舎住まいの先輩幹部は、その地位も名誉もそして

財産もゼロになり、家族は「持てるだけの荷物を持ってここから立ち退け！」と迫られた。官舎の周りにそれを狙って、品物を持ち去ろうとする人々が集まり、異様な雰囲気となった。日本人にはいよいよ危険が迫った。既に金融機関は閉鎖され預貯金は凍結されていて、独身者は手持ちの小遣銭があるだけとなった。

まもなく、ソ連軍に追われるようにして白茂線の列車で前線からの日本兵が到着して、駅前の広場で武装解除が始まった。うなだれながら、また列車に乗せられてどこにか連行されて行った。やるせない気持ちでいっぱいとなった。

避難民も朝鮮北部の会寧や羅津などから茂山を経由し、白茂線の線路上を歩き通し、標高千三百メートルの北溪水駅を越えて続々到着し、白岩は避難民の中継所となり溜まり場となつて、駅や鉄道官舎の周辺は、夜露を避ける人で混雑した。

私は八月末、三人の仲間と共に客貨列車に乗り白岩を出た。四年前に夢と希望を胸に白岩へ着任したが、今はリュックサック一つのみの悲惨この上もない身の

上となり、ひとまず城津を目指した。途中の吉州は危険との情報で、一つ手前の信号場で下車した。苛酷な逃避の第一歩となる。

北の方から避難して来た老人、女性、少年一行の列に加わる。子供は泣きながら手を引かれ、老人は休みたいと訴え、母親は荷物を背に苦渋の顔を覆う。足の裏は血豆が重なりつづれ血だらけになっていたが、そのまま引きずって歩いてきた。沿道で我々避難民を見送る朝鮮人の人々の視線は、哀れみをかけているようにも、一面憎しみを表しているようにも見えた。途中では、「三十六年間にじめた罰だ、どうせ朝鮮には裸同然で来たのだろう！」とも言われた。「先に行つた避難民に水を飲ませてやったのに、その井戸に毒を入れた者がいる。だから持ち物を検査する」とのこと、なげなしの荷物を検査されたこともあった。しかし善良な人も多く、特に老人に対する思いやりは強かった。休憩をすすめ親しく話しかけ「これを食べて元氣を出しな！」と言う人もいたが、さすが儒教の国の住民である。年長者や先祖を敬う国の住民でもあった。

四 城津收容所

城津到着後は、かつて学んだ鉄道教習所の寮の一室に收容された。ある日、朝鮮鉄道の係官から「懐中時計を貸与されていた者は、それを持って機関区に出頭せよ」との連絡があり、翌日出頭したのは主として先輩機関士で、十人ぐらいいであった。係官は、「朝鮮は独立国となり鉄道業務はますます重要となったが、職員も装備も半減し深刻な状態である。朝鮮鉄道再建のために協力してもらいたい。貸与品の懐中時計を返納せよ」という。私も勤務中は、外国製という高級懐中時計を胸のポケットに鎖でつなぎ、正確な運転を自負していたものである。係官は「ここに提出せよ」と言うが、だれも持っていない。激怒した係官は、私たちがコンクリートの土間に土下座させ順番に尋問したが、私たちは異口同音に「避難の途中で、ソ連兵に強奪された」とか「大きくて隠しきれなかった」などと理由を並べて答えた。係官は「そういう一大事のときにこそ、日本人は大和魂を発揮するんだと教えられていたのではないか？」と言って、近くに立てかけてあった

竹ぼうきの棒を抜いて、順番に頭を殴り始めた。「バチツ、バチツ」とすごい音をたてた。さすがに痛い。「あつ！」と悲鳴をあげている。最後尾の私には、殴る音がだんだんと近くなり、二人前まで来たころにはついに恐怖で失神したかのようになってしまった。竹棒は割れて、肩までざくりとたたかれて、だれもが頭から顔にかけて出血していた。

心配しながら帰りを待っていた家族は、夫や親のひどい顔を見て、泣きながら手拭いなどで血をふきとっていた。私は、ただ一人で両腕で頭をかかえていた。

街には避難民が日毎に多くなり、廃屋や寺、神社などにもぐり込み雨露をしのいでいた。せつかくの場所も追われることもあった。ソ連兵による強奪、お金はもとより、腕時計や万年筆などが狙われた。女性の被害は最も悲惨で、銃で撃たれた死体を見受けたこともあった。城津の海岸では、元憲兵、元警察官、そして幹部鉄道技術員の三人が銃殺されたとも聞いた。また、元〇〇駅長さんの娘さんが女学生の制服のままソ連兵三人に暴行され、発狂し行方不明になったなどの

事件もあって、恐怖は身近に迫っていた。

寮の部屋の隅では、そこで避難生活を送っていた母親が人目を避けるようにしながら、娘さん二人に男の服を着せ、ハサミで髪を刈り始め、自分も布をかぶった。近くにいた私を手招きするので、近くに寄った。娘さんは中学生ぐらいか、向かい合って涙ぐんでいた。母親のハサミは震えて進まなかった。私は、あまりきれいに刈らないほうが良いのでは、と助言した。次に、鍋墨を顔に塗ることになった。鼻下と顎を濃くしてみたが、男なら無精髭にもなるが若い娘さんにはうまく塗れない。顔全体をまだらにと男を装う努力もしたが、ソ連兵は胸を探るようになってきた。かわいい盛りのお娘さんの顔に墨を塗る母親の心境を察し、どんなに辛いことかと思った。母親と娘さんの流す涙を見て、私の胸も痛んでいた。

そんななかではあったが、私は鉄道関係の施設に收容されたことは幸運だと思っていた。

五 咸興収容所に移動

九月末ごろになって、「引揚列車が出るぞ！」との

情報に、迷いながらも貨物列車に乗り込んで城津を出発し、三十八度線近くの鉄原に到着した。「これはひよっとすると」と胸はおどった。そこに現れたソ連将校は、「この国境は通行禁止だ。戻れ！」と何と非情な態度でどなった。翌朝、また貨車に乗せられ北上し、咸興駅で下車させられた。収容されたのは、やはりかつての鉄道学校の寮の一室であった。すでに四十人ぐらゐがおり、その半数は元鉄道員とその家族だった。

咸興はかつて日本が進出した工業都市で、政治、経済、軍事の中心地であったが、避難民で混乱していた。坊主刈りのソ連兵が街頭を闊歩していたが、これらのソ連兵は、終戦直前に急遽シベリア方面の刑務所から出されて動員された囚人だとか。坊主刈りは、前科者の印ということであった。長髪の隊長、憲兵、そして将校の目を逃れながらの略奪、強姦などの蛮行に避難民はおののきながら生活していたが、抵抗することは自殺行為に等しく、まさに国の保護を失った敗戦国民の悲しさを痛感した。咸興での避難中に遭遇した悲劇はいろいろとあるが、私の脳裡に強く残っていること

を二、三書き記しておきたい。

(一) 夫に対する義理か

私ら少年組と中高年男性組、そして男性を装う女性組など、独り者は室の入り口近くに寝て、夜は薄暗くしていた。

ある晩、軍靴のままのソ連兵が忍び足で入って来た。入り口の私らは眠ったふりをする。ソ連兵は、太めのマツチ棒を壁や床にこすりつけて点火、寝顔を照らして品定めをするようにしながら奥に進む。夫婦者を見つけて、夫に拳銃を突きつけた。奥さんを要求している。奥さんは無抵抗でソ連兵に連れ出された。二十分ぐらいすると何事もなかったかのように戻って来た。夜明けになって好奇心の強い若者が頭をもたげ、「だれだったろう！」と奥の方を眺めていた。奥さんは皆に見られないようにハンカチで顔を隠し、夜明けを待たず静かに出て行った。

このことがあってから、夜もある程度明るくし、皆が起き上がり話をするようにした。その後も何回かソ連兵は来たが、様子を見る程度で帰って行くようにな

った。それからあのような被害はなく、効果抜群であつた。

また、ある二人の婦人が買物帰りにソ連兵三人に囲まれ、兵舎の方に連れ去られた。翌早朝、兵舎の方からうなだれて帰るのを見たという人もいたのだが。この二人の夫人は自殺したとのことだ。

(二) 生も死も同居

片隅の敷布に囲まれた中から元気な産声がした。お母さんの動きは全く聞こえてこない。赤ん坊を抱きしめているのだろうか。誕生に拍手を送るべきか、でも哀れ、生きられるだろうか。夫はソ連兵に連行されたとのこと。私は何の手伝いもできず、ただ親子の健康を祈るだけであつた。

また、一方で一人の老人が亡くなった。ひっそりと香が匂う。介護者もなく。どう弔うか日本人会が協議中とか、何とかお寺さんをお願いしようとのことらしくあつた。

(三) 貴重品を奪われまいと、隠す戦術

避難民も自己防衛にいろいろと策を練っていた。地

獄の沙汰も金次第と言われるとおり、やはり金があれば買物もでき、ソ連兵の「マダムを出せ！」との要求にも金を出し合つて避難民の中から志願して行つてもらつたこともあつた。やはり一番狙われるのはお札だ。これをどんな方法で隠すか、リュックサックの背負い紐や底、靴、靴下、パンツほか衣類、帽子に縫い込み家族皆で分散して持ったが、ときにはリュックサックそのものを奪われることもあつた。

いちごつこのごとくにいよいよ策も効かなくなり、周囲の林や畑に用便を装い、先に穴を掘つて大事なものを油紙に包んで埋め、その上に糞をして目印にするなどの策も実行された。また、それを狙う同胞の避難民の輩もでてきた。

(四) ソ連兵の策に、はまる

ある日の昼過ぎ、ソ連兵二人が、大きな黒パンをかざして避難民収容所の広場に来た。黒パンはソ連兵の食糧であり、それを手に入れるためには身を惜しまない女性も出るなどのこともあつた。これを見た子供たちは、もらえるものと集まって来た。ソ連兵は帽子の

上から子供の頭をなで、「可愛い」という仕草をしていた。子供たちは、喜んで兵を取り囲む。すると、ソ連兵はにわかにな態度を変えて子供たちの帽子を全部取り上げ、パン一つを残して足早に帰って行った。ソ連では、子供を集団教育のために一定期間親元から離す。そのようなときには、子供をかわいがり頭には手をあげないと聞いていたので、子供の帽子に札を縫いこんだ人が多かった。親たちは「ソ連兵の策にはまった」と齒ぎしりをしていた。

(五) 女は弱し？ されど母は強し

その日も暮れようとしていたころ、十人ぐらいいた部屋に、拳銃を腰にした丸坊主のソ連兵が入って来た。大男である。「また来たか？」とみんなが後ずさりすると、ソ連兵は獲物を狙う野獣のような目で部屋の中を見渡していた。

一番奥にいた二十代の女性が、小さな箱包みをそつと背中の方に隠した。それを見たソ連兵はすぐに足早に近付き、それを出せと迫る。

その女性は「駄目だ！ 駄目だ！」と胸に抱きしめ、

さらに股の間に挟んで奪われまいと必死になっていた。ソ連兵は強引に太い腕を差し込んだ。引つ張り合いとなつているうちに箱がこわれ、白い粉がばらばらと落ちた。ソ連兵は顔を近づけてじつと見つめていたが、骨粉であることに気が付き、軍靴で踏み散らし辺りを睥睨しながら出て行った。彼女は肩を震わせて泣いた。だれも黙って動かなかつた。私は顔見知りではあつたが、慰める言葉も出なかつた。彼女は気を取り直して「ゆうちゃん！ ゆうちゃん！」と語りかけながら骨粉をかき集めた。私も骨粉集めを手伝つた。彼女は言つた。「私が今やったことをこの子は怒るだろうな！ ご免ね！ 許して、痛かつただろう」と骨粉に顔をすりつけて泣きながら言つた。その人の夫は日本軍の憲兵で、敗戦後ソ連軍に連行されていた。「その子は初めて授かった子供だった。夫は別れ際に『必ず家に連れて帰れ、もしものときにはこれを』と言つて青酸カリを渡された。私はどんなにしても生きて帰り、いつか帰る夫を待つて、夫や私の母にも報告し、墓地に埋葬するのが私の責任です」と母としての強い言葉を聞いて

た。

その後の彼女の積極的な生き様を見て、私はきつと無事帰国したと信じている。

六 オモニの情けで生き延びる

私は身寄りのない独り者の少年難民であつたためか、收容所を転々と移動させられた。十月になつて食糧も大豆の絞り粕などになり、周りには栄養失調と高熱のために死者も出てきた。私は早朝一人で農家を回り「食べるだけでよいから働かせて下さい」と哀願したが、

汚く、虱しらみだらけの難民を使うどころか、近付くのもい

やだという人もいた。農家生まれの私は、鎌を借りて稲刈りをして見せたところ、「危ないな」と言いながらも「忙しいときだけだぞ！」と念を押され働くことになった。稲刈り、稲こきと農奴のつもりで、唯一の楽しみである昼食を思つて頑張り、夕方にはくたくたになつて戻つた。

五日ぐらい経つた休憩時のおやつにお菓子が出た。

私はオモニ（お母さん）に「帰つてから食べたい。持

つて帰つて良いか」とモジモジしながら聞いた。「どうして？」と聞かれたので、「実は收容所にいる友だちが何も食べられない。死んでしまつた者もいる。寝たきりの人に食べさせてやりたいのだ。どんなに喜ぶか」と答えた。オモニは「お前は自分が食べなくても友だちに食べさせたいんだね」と言いながら、もつと持つて行けとポケットに入れてくれた。

翌日、オモニが「お前はよく働く。收容所からは遠いから、ここに泊まらないか。あんな所には病気になるぞ。家族みんなで相談したから」と言われたので、泊まることになった。家族は六人で土間も含め三部屋だつた。おばあちゃん夫婦の部屋の隅に寝た。最初の晩にリンゴを拾つて食べた。おばあちゃんが飛んで来て、「腹をこわすからやめろ」と食べかけたのを取り上げ、部屋に入つて売り物のリンゴの皮を剥きながら「夕食も遠慮しているようだな、たくさん食べろ」と言われた。夜中の二時ごろのことだつた。

とても日本人難民を泊めることなど考えられない環境の中で、オモニは近所の人たちに、とてもよく働く

チョンサラメ（よい人）だ、と懸命に弁解していた。私も他人に見られないように努めた。暗いうちに起きるのはオモニと私。竈を焚きながら、私の母のことなど親子のような会話が楽しかった。私も馴れない仕事に手足にも傷が絶えなかった。ひそかに「明日は雨が降らないかなあ」と、夕暮れの空に祈ったこともあった。雨の日は、六歳の女の子と小屋で軽作業をしながら日本の子供の話をした。楽しい日だった。

十二月になり農閑期となった夕食時、オモニが寂しそうな顔で「周りのこともあって、これ以上はどうしても泊めることはならない。かわいそうだが明日は収容所に帰ってもらいたい。今朝も、町にリンゴを売りに行く途中で避難民の死体を荷車一杯に積んで行くのを見た。絶対に死ぬなよ。国の母さんが待っているぞ」と涙を流しながら、自分とアポジ（お父さん）の汁碗から肉を取って私の碗に入れてくれた。私は胸に迫り、下を向いて目をつむった。それでも涙がご飯に落ちる。隣にいた女の子が、黙って私にフキンを差し出した。

翌朝、家族から「死ぬなよ。また訪ねて来いよ」と

弁当まで作ってもらい、いつまでも手をふって送ってくれた。白い顎髭のじいさんも一緒だった。帰る道々で「どうしてオモニが私を泊めてくれたのか、おじいさんが昔、牧師をやったせいか」とも思った。いつか私がリンゴの収穫で木に登っていたとき、「木が折れやすいから見ている」と言って下に立っていた。そのとき言っていたことが忘れられない。「戦時中は牧師と言っても何もできなかったが、キリスト教徒は酒を飲んで暴れたり、兄弟喧嘩は絶対にしないものだ。どんなに困ったときでも救ってくれる神がいるよ」と。私にはこの御恩返しができるだろうか、それには今は何としても生きることだと思った。収容所に帰って間もなく、比較的元気な者は咸興の南にある富坪収容所に移された。

七 富坪収容所の悲劇

富坪収容所は、北朝鮮最悪の収容所と言われた。富坪収容所の悲劇については、「平和の礎」においても多くの方々はその実情について書いておられるが、私もまさにその中の一人ですが、独り者の少年だった私は、

周囲の限られた範囲内でのことだけを知る程度であったが、収容所の建物は旧日本軍の演習場の兵舎だったということだが、そこは地獄だったとの印象だけが残っていた。最近目にした資料が、その実態を語っている。一九四六（昭和二十一）年一月付の咸鏡南道檢察部、李相北検事の調査報告書である「富坪の悲劇」には、その実情が細部に亘り書かれているが、その中のごく一部分を再録する。

○住居及び施設状況

- ・分宿九棟中三棟以外は窓、戸等の設備は全くなし。
- ・九棟全部は炊事施設皆無にして各屋内で炊事をするため煤煙は充滿し目を開ける術もなく、一時間にわたる調査中も呼吸困難となる。
- ・分宿九棟中三棟以外は採光不良のため白昼にても咫尺を弁せず。
- ・衣類は一枚にて着替へはなく、寝具もほとんど無く、その全部がかます 吠をおおいて就寝する

状態なり。

○移動日本人の保健状態

- ・現在の残留総員二四〇一人中、活動可能の男女は五〇〇人に過ぎず、残り一九〇〇人は老幼並びに不健康者、重傷者にして、栄養失調その極に達し一人の例外もなく手足は蒼白となり、皮骨相接し身を起す能わず。半ば死せる人体が吠の下に埋没するとの状態なり。

とある。この報告書が北朝鮮側、ソ連軍側、日本人委員会などの関係機関に大きな衝撃を与えたことは確かである。

富坪収容所難民全滅の危機を救ったのは、朝鮮人民委員会、共産党支部など広範な方々の援助によるものであり、この事実を知った以上は富坪収容所で生活し、特に生き残った者は忘れてはならない。これ以降、富坪の処遇が改善され、生きて帰国できた大きな要因と理解し、改めて感謝している。

一月末の収容所は零下二十度にもなり、栄養失調、

やせ衰え吠にもぐり、かつてあふればかりにいた避難民もまばらになっていた。やや栄養を蓄えていた私は、ときどきオモニを訪ね食べ物をいただいて帰り、弱りきった友らを懸命に看護したが、だんだんとお粥の米粒さえも嫌い、高熱のため自分のオシッコを飲み、また夢遊病者のように吹雪の屋外に出て行って倒れ、死んでしまう者も出た。かすかな声で「日本に帰りたーい！ 及川有り難う」と独り者の友は寂しく死んでいた。死体はトタン板に乗せて、演習場に掘られた塹壕に運び埋めるのだが、土が凍結して掛けられないこともあった。天候次第では、死体と何日も一緒に寝ることもあった。中には、自分のより良い服は剥いで頂戴する者も現れた。私は親友の遺髪だけでもと思ったが、髪の毛を切る道具がない。髪の毛の先を石に乗せて、小石で叩いてむしり切った。頭皮まで剥がれることもあった。

いたまま死んでいた。どちらが先に死んだやら、一緒に良かったろうに。私は独り者で良かったとしみじみ思った。

二月の初めころ、ソ連軍の乾燥機付き自動車 came。 「虱、病菌を死滅させるから着ている物を出せ」と集められた。寒さに震えながら待つこと三十分、返された衣類を見て虱の屍殻の多さに仰天、白く太く米粒大ぐらいだ。全身にたかっていた虱が、熱さに耐えきれずだんだん布の厚い方に避難したのか、両脇下や陰部や肛門部の縫い合わせ部分に、盃一杯分くらい溜まっていた。だれかが「カルシウムだぞ」と言ったので、食べられるものなら何でも、まして栄養になるならと食べ始めたが、さすがに他人の衣類の虱にまでは手が出なかった。多少口がむかつくが、特に気持ちが悪くとは思わなかった。だが、仇を取った気分もあった。

三月になり、すべての環境が少々改善されたが、私は体力の衰えを感じ、寝ていることが多くなり熱も出るようになって、ついに来たかと死期の迫るのを自覚するようになった。「及川も長くないか！」とのささや

きが聞こえる。オモニの家が近ければ、とも思った。ここで死んでたまるか。「死ぬなよ！」と叫ぶ母の夢ばかり見るようになった。

時折意識が朦朧となることもあったが、四月になると陽気に誘われ、外に出て草木の若芽をあさるようになり、また農家の畑を耕す所に行つて邪魔になつてゐる「ヒルガオ（昼顔）」の根をいただいた。この根は薩摩芋の根ほど太くないが、おいしいと思つた。

そんなものを食べるようになって、糞も顔も色づき徐々に元気を回復した。収容所の管理も緩み、脱走も容認しているように思えた。

八 脱出！ 三十八度線を越え帰国

五月初め、暗いうちに収容所を出た。特にリーダーもなく、途中二十人くらいの集団となつたが、老人が見えなくなつた。老人は「私は歩き通せない。迷惑も掛けたくない。人目につかない所で死にたい」と言つていたので、夜中に山に入つて行つたものと思われた。歩きながらも、どこに向かつているのかよく分からなかつたが、とにかく北ではなく南西の方に違いない

と思ひながら、約二十日間歩き通した。このころには持ち物も特に無い。通る村々の人たちに哀れみの目で見られ、親切に近道を教えてくれる人もいた。

朝方、足を引きずりながら黄海側の三十八度線に着いた。小川が流れ、特別な境界標示もなく、ソ連兵と朝鮮保安隊の二人が立つていた。形式的な検問所であつた。これが生死を分けた三十八度線かと小さな橋を渡り、南側の小さな丘に腰をおろし、血豆だらけの足を見ながら、とにかく生きたとの実感に浸つた。北に向かつて「馬鹿野郎」と叫ぶ者もいたが、私は「オモニ、有り難う！ 生きたぞ！」と手を合わせた。丘を降りながら、朝鮮の友だちが教えてくれた民謡「アラン」の中の「恋人との峠の別れ」を口ずさんでいた。道路に出た。アメリカ兵のジープが通りかかつた。初めて見るアメリカ兵は、目は青く服装は端正、首や指には金の鎖を付け、陽気である。「どうぞお乗りなさい」と手招きする。少々戸惑いながら乗る。着いた所が板門店駅。貨物倉庫に集められ、頭から下着の中までDDTを散布された。この貨物倉庫ではジャズを流

しながら、米兵と日赤の腕章を巻いた看護婦さんが、次々に入って来る避難民の世話をしていた。

ひと通りの身体検査が終わり、客車に乗って京城に行き、日本人委員会のお世話で一泊した。翌日釜山に移動、三日待って夕方引揚船に乗った。船室では所構わずごろ寝をした。

翌未明、「日本だ！日本だ！」と叫ぶ声に目をこすりながら甲板に出た。霧の中に島影が見えた。お互い哀れな姿など構わず、抱き合って泣いた。そこは山口県仙崎港であった。簡単な手続きを終え、乗車券を頂く。連れ立つ人もいない一人旅、車窓から眺める風景は「国敗れて山河あり」だ。富士山の勇姿、だが反対側は焼け野原だった。

六月一日、郷里のバス停で降りる。風呂敷包み一つ、よれよれの服、あまりにもみすぼらしい姿だった。懐かしの通学路を避け山道を通り、いつも拌み、遊んだ生家裏の天神様にお参りし、思いを込めて鐘三つをつけて畑の道を降りて行った。母がいた。呆然として私を見つめている。「誠か！」と走って来て抱きしめ、泣

きじやくった。五年ぶりの母の温もりだった。家に入り、まず仏壇の前に行った。そこには、母が毎日私の分として供えていたご飯があった。

九 引揚後の生活

生家に帰った私は、農家の長男として両親に甘えながらも、自分の責任を自覚し、徐々に健康を取り戻し農業に励んだ。戦後の食糧難の時代で農家は全盛期でもあったが、かつての農家の苦労を知る私は、村の駐在さんの勧めもあり、昭和二十四年一月、岩手県警察官を拝命した。当時は戦後の混乱期でもあり・学園紛争、基地闘争、朝鮮戦争などのほか刑事事件も多発したが、私は「公務員として公僕として社会に奉仕する」を信条として誇りを持って勤務した。警察の組織は三角型で、その頂点を目指しての厳しい競争社会でもあったが、多くの方のご指導とご支援を賜り、県都警察署長を最後に三十八年間の勤務を終えた。その後、県交通安全協会を四年、警備会社代表取締役として十年間勤務し、平成十六年五月退任した。

家族は妻のほか長男、次男がおり、子供はそれぞれ

独立別居、兄弟八人、ときどき生家や温泉で兄弟会を開き、楽しくやっている。

十 母の思い出 昭和四十一年亡くなった母について

母は病になり、どうしても誠のそばで死にたいとのことで盛岡に来て、日赤病院に入院した。一年間療養の末に、五十五歳の若さで亡くなったが、入院中は一日も欠かさず妻と一緒に見舞いに行き、母の喜ぶ顔を見た。

頑張り屋の母が心を込めて言ったことは「親孝行の一番は兄弟仲良くすることだぞ」であった。十五歳で嫁に来た母は、父が日支事変で二回召集された留守中も大きな家を守り、姑に仕えながら農業組合で働いた。私は子供のころ母がいつ寝て、いつ起きたのかわらなかつた。それは大変な苦労だったはずなのに、入院中も「仕事が大変だった、苦労した」などとは一言も言わず、「お嫁さんに買ってもらった新しい着物を着て、お父さんと伊勢神宮参りに行った。楽しかった」など、楽しかったことばかり言っていた。日増しにやせ細り、

小さくなって死んでいく母を見るにつけ、やはり思うのは北朝鮮で暴行を受けて死んでゆく母を見た子供たちが、どれほどつらかったかと今にして思う。

父は弘前歩兵第三十一連隊出身で、日支事変では二回の召集を受け、北支を転戦した。ある方が私に「北支の戦場で、あなたのお父さんは私の上官であった。厳しさ以上に思いやりがあった方だ。酒、タバコは一切やらず、全部部下に分けていた。背も高く立派な軍人だった」と。私は内心嬉しかった。父は八十八歳の長寿を全うした。

私は本年春の叙勲に際し、はからずも瑞宝小綬章拝受の栄に浴した。これ偏に、皆様の永年に亘るご指導、ご支援の賜と深く感謝している。

現役時代は休日も出勤することが多く、単身赴任することもあったが、家庭をよく守り、私的には長男の妻として、良く私を支えてくれた妻あればこそと感謝している。

現在は、地域の安全、明るい町づくりなどボランティア活動に携わっている。

十一 今人生八十年を顧みて

私は、人一倍の苦勞と相応の努力をした。そこから生まれたものは不屈の精神であり、「若いときの苦勞は買つてでもせよ」を実感したことである。

また、いつ、どこで何をしたときも、周りの人々から特別のお世話を頂いた。他人様に感謝する心が強くなった。有難いことである。

十二 終わりに

昨今、複雑な国際情勢の中ではあるが、北朝鮮との国交回復が成り、私を護ってくれ、今は富坪の地に眠る命の恩人オモニさんほかの大勢の方々の慰霊と、オモニさん一家に御礼を申しあげに行ける日の一日も早いことを祈りながら、体力維持に努めている。

